

第3回 天然アユ生態調査実行委員会議事要旨

1. 会議概要

○日 時：平成29年3月14日（火）13:30～15:30

○場 所：豊田市職員会館3階 第1部室

○出席者（規約の名簿順）

（アドバイザー）高橋 勇夫（たかはし河川生物調査事務所 所長）

（アドバイザー）村上 哲生（中部大学 教授）

（アドバイザー）内田 臣一（愛知工業大学 教授）

（アドバイザー）赤堀 良介（愛知工業大学 准教授）

（委員長）加藤 重雄（矢作川漁業協同組合 代表理事組合長）

（委員）新見 克也（矢作川天然アユ調査会 会長）

（委員）大森 正昭（国土交通省 中部地方整備局 豊橋河川事務所 事業対策官）

（委員）中村 公要（愛知県 豊田加茂建設事務所 河川整備課長）

（委員）早川 匡（豊田市矢作川研究所 所長）

（事務局）豊田市矢作川研究所

○議 事

（1）ソジバにおける河道内測量データについて（資料1）

（2）ソジバにおける実験計画について（資料2）

（3）アユの産卵状況調査の経過（資料2）

（4）その他

- ・議事の公開について
- ・今後のスケジュール
- ・報道発表について

○配布資料

- ・資料1：メッシュ測量結果等
- ・資料2：研究計画書「天然アユのなわばり行動の回復と産卵場の創出」

2. 議事録要旨

(1) ソジバにおける河道内測量データについて

■事務局説明

事務局が資料1をもとに、3月初旬にソジバ(=阿摺ダム下流約700mの瀬)で実施したメッシュ測量結果と、これを元に修正した「実験区の配置案」等を説明した。

■主な意見等

「礫置き区」へ礫を置く際の敷均しは、バックホウで施工することになるが、このとき「地形に沿って20cm厚で敷均す」ことは水中作業という条件下では難しいと思う。事前にバックホウのオペレーターと相談しておく方が良い。

⇒事務局：了解しました。

「礫置き区」から流れ出た礫の追跡は具体的にはどうするか。

⇒事務局：コケ植物の付着状況と礫のサイズから判別を試みます。あとペンキを塗るなどしてラベルした石を置いて追跡したいと思います。

「対照区」と「礫置き区」の位置を現地で確かめられるようにしておく必要がある。

⇒事務局：陸上に打った杭に加え、実験区内にある巨石の位置、空中にワイヤーを張るなどして効率的にアクセスできる方法を探ります。

(2) ソジバにおける実験計画について

■事務局説明

事務局が資料2のなかの「ソジバでの実験計画」に関する部分を説明した。

■主な意見等

友釣りに加え、投網でも採捕してアユの胃内容物を確認した方がよい

⇒事務局：了解しました。瀬の下流にはかなり深い淵があるので、そこでのサンプリングも考えながら進めていきます。

底生動物調査は、調査範囲(10m×10m)が広いため、攪乱の影響がかなり大きくなる。1回の調査範囲を小規模化する。また、底生動物調査ができる水深の範囲が狭いので、実験区をもっと浅い右岸側へ広げる方が良い。

⇒事務局：了解しました。

溶存酸素計を置く場所について、現在の配置だと常識的には差が出そうにないが机上では予想の付かないことなので、最初にこの溶存酸素計に関する実験を行って、差が出れば本格的に実施すれば良いし、駄目な場合には別の方法を考える必要がある。

⇒事務局：試行錯誤しながら進めます。

年次計画をみると、「ソジバでの試行実験の後に豊田大橋付近で実証実験を行う」となっているが、籠川合流点から下流は、それなりに砂礫の移動が有り、底生動物をみる限りではそれほど環境は悪くない。豊田大橋付近で実験する際は、既にそれなりの砂礫が流れていることを踏まえると、かなりの量の砂礫を投入しないとあまり効果が無いように思う。

⇒事務局：アユの釣果は豊田大橋付近でも随分と落ち込んでいます。川底の状態が変化していると感じるので、ソジバでうまくいけばここでも実施することを考えていきたいと思っています。

実験のフロー図（資料 8 ページ）について、礫が転がってコケが剥がれてもアユが釣れないというケースがあるが、矢作川の場合にはその可能性があると思う。難しい問題となるが、アユが周辺にいないのであれば、別の問題があると考えて、そこを解決していかざるをえない。

⇒事務局：今回の仮説にしたがって研究を進め、もし駄目なようでしたら別の要因を探ります。

「アユが釣れない」という川では、水温が結構効いているというケースが多いので、簡易の小さい水温ロガーを平面的にたくさん置いてみたらどうか。また、濁度（透視度）も把握した方が良い。

⇒事務局：了解しました。

(3) アユの産卵状況調査の経過

■事務局説明

事務局が資料 2 のなかの「アユの産卵環境改善の計画」に関する部分を説明した。

■主な意見等

現在の調査計画は「アユの流下量が少ない」ことを問題としているが、矢作川のアユの流下仔魚数の落ち込みは、調査精度の悪さなどでは説明がつかないような、普通ではあり得ないものである。なぜ、アユの流下量と遡上数との間にギャップができるのか、アユの生活史全体を通してチェックする必要がある。

⇒事務局：本流にある3つのヤナでの漁獲状況なども参考にしつつ、広い視点で親アユの移動状況を考えていきます。

豊川でも流下仔魚の調査をしているが、流下仔魚の量が日毎に全く異なったり、プランクトンネットを入れる場所によっても採集量が結構違ったりして、流下仔魚数の推定がかなり難しい。また、矢作古川に流入した仔魚数をどれだけ調べているかということもある。こうした流下仔魚数の推定にあたっての精度の問題を含めた調査の手法を豊川・矢作川をあわせて勉強し合うのも良いと思う。

⇒事務局：矢作川ではアユ仔魚の流下が真夜中に流下する点で調査の労力もよりかかるのですが、豊川での調査方法とデータを参考にさせていただきつつ、調査を進めてまいります。

(4) その他

- 議事の公開について

事務局が、今回の委員会の分から、発言内容をまとめた「議事要旨」と、委員会で使用した「資料（個人情報を含むもの等を除いた公開可能なもの）」を矢作川研究所のホームページで公開していく旨を説明した。